日本大学薬学科

桜薬会会報

12

薬学部昇格を祝って

桜薬会会長　高　仲　　正

永年にわたる懸案でありました薬学部の設置は、昨年12月23日に文部省より認可がおり、理工学部習志野校舎に隣接した千葉県船橋市習志野台に校舎の新築も終わりました。

4月1日からは日本大学薬学部として発足し、4月2日には開校式が、また9日には開講式がそれぞれ行なわれる運びになりましたことを、心からお祝い申し上げます。

同窓の皆様の切なる願いでありました薬学部への昇格は、これを日本大学創立100周年記念事業の一つとして強力に推進して頂いた高梨総長、柴田理事長、川崎前常務理事、並びに直接ご尽力頂いた加藤渉前理工学部長及び木下茂徳現理工学部長を始めとして関係の諸先生、更に薬学科の先生方のご努力の賜物と深く感謝しております。

日本大学工学部に薬学科が設置された昭和27年当時は、全国に薬学科は22校でしたが、現在では46校になっており、今春の薬剤師国家試験の受験者数は1万人を越えております。医学部薬学科が多かった当時、製薬に携わる薬剤師を養成することを主眼として工学部に設置されたことは、それから約10年を経過して各大学が製薬学科を設けたことを考えると、設立の趣旨は時代に先駆けたものでした。しかしながら36年を経過した現在では、更に生物薬学科が加わり各大学とも2学科または3学科で構成されております。

大学教育の目的は基本的な学問を身につけ、偏りのない知識豊かな人を育成するものであると云われていますが、薬学教育には職業教育としての面も含まれており、その内容は学問の進歩とともに、また社会の要求によっても変化して来ております。我が国の医薬品が外国からの導入品を主としていた時期は、薬学教育は有機化学を主体としたものでした。独自の新薬開発をより強く目指すに従って、薬理学が大きな比重を占めるようになり、さらに薬による事故が取り沙汰されるにつれて、毒性学が発達してまいりました。現在では新医薬品の承認をうるためには、規格、安定性、薬効薬理、一般薬理、一般毒性、特殊毒性等に関する膨大なデータと、第1相から、第3相にわたる十分な臨床試験の資料が必要で、医薬品をより有効かつ安全に使用するためには、動物を用いた有効性および安全性試験の重要性が増し、その割合も非常に多くなっております。この時期に当り、新薬学部に生物薬学科が設けられたことは、我が国の趨勢からすると幾分遅きに失した感もありますが、単に薬学科を二つに分けたものとして

目次

薬学部昇格を祝って／高仲　正…… 2
薬学部の発足を目前にして／桐沢　誠…… 3
第一回薬学部入学試験を終えて／椛沢洋三…… 4
新任教員をご紹介します…… 5
職場往来……10
香港便り／原田貞亮…… 11
研究室だより…… 12
駿河台コミュニティー…… 15
支部だより…… 18
事務局だより…… 19

とらえず、医学、獣医学との学際領域を取り込んだ学問を目指すならば、今後十分な発展が考えられます。バイオテクノロジーの進歩に伴い最近は、ヒトペプチドホルモンやインターフェロン等遺伝子組換えにより生産された医薬品が上市されております。これらの医薬品は元来ヒトの体内で生産されるものと同一のものですが、微量の不純物や極く僅かな構造の違いがヒトの免疫反応を刺激し、連用すると抗体価の上昇をきした例も見受けられます。このように従来用いられてきた化学合成による低分子の医薬品の知識だけでは不充分な点が有効性および安全性の両面で起きつつあります。時代とともに大きく変化しつつある薬に対して、その専門家としての薬学出身者の役割はますます重要になっており、今後は疾病等生体の変化を理解しうる十分な知識と医薬品の効力や毒性に関する正確な知識を身につけるための基礎となる教育をより充実していかねばと考えます。

薬学領域における学問の進歩と多くの新薬の開発、更に学際領域の発展は薬剤師の役割を広く、深くしており on the job training 以外による広範な生涯教育の必要性が認識されております。この面でも新薬学部は斬新な知識の中心となり、各方面で活躍している同窓生と協力して本学出身者の向上に当たって頂きたいと存じます。

新薬学部の実績が明かとなり、評価が定まる迄には、今後10年以上の歳月が必要と考えます。薬学部を時代に則して発展させより良いものにするためには、直接の任に当たる教職員はもとより、同窓生も互いに力を合わせて評価を高めるべく努力を重ねて行くべき時であると存じます。

なお、今回の薬学部昇格に際し、同窓の皆様に物心両面からのご援助を仰ぎたく、その方法について常任理事会等で種々協議を重ねてまいりましたが、昇格が日本大学創立100周年記念事業の一環として実現した経緯から考えて、桜薬会独自で行なうよりは、100周年記念事業として行なわれる募金に積極的に協力することと致しました。ついては後日、大学より皆様に募金の案内が送付されると思いますので、その節は宜しくお願い申し上げます。

薬学部の発足を目前にして

薬学科教室主任　桐沢　誠

桜薬会会員諸兄姉には、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

桜薬会報を通じて、お報せしてきた学部への昇格が、漸く実現することになりましたので、この件について最終のご報告をすることにいたします。前回の会報（11号）で、昨昭和62年2月に、設置申請の初年度審査に合格し、また薬学部校舎新築工事起工式が行なわれたこと申し述べましたが、その後、7月に提出した第2年度の申請に対し、9月に教員資格審査、実地視察が行なわれ、昨年末12月23日文部大臣より本年4月1日の薬学部開設が認可されるに至りました。この間、大学としては、昨年10月薬学部開設準備室（室長：大竹学務担当副総長）を設けて準備を進め、薬学部開設準備運営委員会（教授会に準ずるもの、委員長：大竹副総長）で、薬学部の昭和63年度入試について、付属高校推薦入試（募集人員55名）、一般高校公募制推薦入試（募集人員25名）を1月21日に、一般入試（募集人員100名）を2月6日に実施することを決定し、実施いたしました。お陰様で、一般入試の志願者は、昨年度志願者1432名の畧倍に近い2791名に達し、薬学部としての最初の仕事が上々の首尾で、教職員一同、大変嬉しく同時に安堵いたしました。

理工学部に割愛して頂いた習志野校地の一隅に、理工学研究所の基本設計により工事が進められ、3月8日竣工検査が終わった許りの新校舎は、ハイセ

ンスな素晴らしいものです。皆様の後輩が落ちついて勉強できる教育環境ができたと考えております。贅沢を云えば、現在のところ、交通事情に若干難がありますが、数年後には、東西線が延長されて、都心から楽に通学できるようになるそうです。今年の桜薬会総会は、この新校舎で開催されると聞いております。多数の方が出席されご覧下さるようお願いします。薬学部の発足を契機に、皆様との絆を一層強めるよう、皆様のお仕事を始め種々の面でお役に立てるような機能を整えて行きたいと考えております。

薬学部となって、ようやく世間並みの規格となり、また新校舎ができて、どうやら私大の平均を大巾に下回らない施設になったという状態ですが、現状に比べれば、教育研究施設は格段に改善され、21世紀に向かって大きく飛躍する基盤が整備されました。この基盤を活かして、先ず魅力のある大学院の設置を第一目標に、我々教職員は研究水準の向上に努め、効率的な研究を行なって、多くの成果を挙げなければなりませんし、同時に教育面では、理工学部薬学科在学生の教育を継続し乍ら、新学部の教育を充実、完成させて行かなければなりません。今後内容を充実していくことが、我々の責務と自覚し、山積する難問の解決に、教職員一同一丸となって努力していく覚悟です。以上余り夢のある抱負ではありませんが、将来目標としては、本邦最大の規模を誇る総合大学にあるという利点を活かして、他学部の協力を仰ぎ学際的な分野での教育研究をも充実させ、他大学にみられない特色を持った自由闊達で、スケールの大きな薬学部に発展してほしいと考えております。繰り返しますが、昭和27年薬学科設置以来の課題であった学部への昇格が、学内諸般の事情からのびのびになっておりましたが、今般漸く薬学部の開設という形で解決され、4月2日には、竣工式、開校式が挙行されることになりました。これは偏に、この計画を先導された加藤前学部長、その計画を一部変更し実行された木下学部長、そして薬学部開設に理解を示され両学部長を支援して下さった柴田理事長、高梨総長、さらに大学本部、理工学部を始めとする全学のご盡力によるものでありまして、この紙上をかりて、深甚の謝意を表わすものであります。最後に桜薬会の皆様の暖かいご支援に感謝いたします。（63.3.15.）

第一回薬学部入学試験を終えて

入試実行委員長　椛　沢　洋　三

長い間念願であった日大薬学部が、暮れも押し迫った12月23日正式に認可がおりその初仕事が入学試験でした。この記念すべき第一回日大薬学部入学試験の結果についてかいつまんでご報告いたします。前号p.4入学試験についてを併せて参照いただければ幸いです。又表中の（ ）中は女子の数です。

試験	付属推薦	一般推薦	一般入試
期日	1月21日（木）		2月6日（土）
場所	理工8号館		理工 1, 8, 9号館
科目	小論文 面接	英語 化学 作文 面接	数学，化学，英語
募集人員	55名	25名	100名
志願者数	62名	143名	2791名 (1528)
受験者数	62名	143名	2612名 (1409)
合格者数	62名 (40)	30名 (22)	合格 108名 補欠 156名 (152)

推薦入試は付属高校と一般高校に分けて行なわれました。付属からの推薦基準は理工学部と同じ統一テスト210点以上で、所属するクラス内での成績ランキングが、高校によって異なりますが、40、33、25％以内とし全付属23校に対して64名を依頼した

ところ、2校の辞退がありましたが選考の結果全員が合格。一般推薦では、募集人員が25名と少なく特定の高校を指定することが困難で、とりあえず理工学部の指定校332校に対して、1校1名とし、3年1学期までの成績評価がB以上で本学に入学を強く希望する者、または学校長が特に推薦する者、として情宣したところ噂を聞いて大学に直接問い合わせた高校など53校を加え143名の推薦を受け30名の合格となりました。この一般推薦入試は、他大学ではすでに12月初めまでに入試が終了していましたが特に高校側との絆を大切にして実施されました。64年度は他大学なみのタイミングで実施されるかと思います。

そして一般入試ですが、定員180名のうち残り100名に対して受付開始から締切日までほとんど一直線に志願者が増え、昨年度の1、432名に比べてまさに倍増となり、恐らく私立薬大のトップ27.9の倍率で新聞発表されました。新学部への受験生の魅力と期待の大きさを感じ身の引き締まる思いです。試験日は関東地方では東薬大男子部と重なりましたが2月6日、今後もこの予定です。63年度は学部単位で志願者受付をし特に学科別にしませんでしたが、学生は高学年に進んで志望学科を決定することになります。全問マークシートの300点満点で、最高点は261、平均点180.4、合格者の最低点は232、補欠でも219点と予想をこえた高い点数でした。併願校調査では東邦大薬が913名、これは受験生の35%を占めてトップ。続いて北里大薬863名、明治薬科大855名がベストスリー、以下昭和薬科大、昭和大薬、星薬科大、城西大薬の順位なっています。

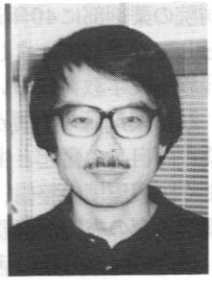
また、留学生・帰国子女入試では、帰国子女の志願が1名ありましたが事前に受験を辞退し該当者なしになりました。

合格の判定はいずれも日本大学本部で開催された薬学部開設準備運営委員会の審議を経て行なわれています。志願者数ですべてを占うことは勿論できませんが、入学試験に関しては上々のスタートかと思います。今後とも皆様のご支援とご理解の程よろしくお願い申し上げます。

新任教員をご紹介します

薬学科、薬学部に着任された先生方より寄稿をいただきました。御着任早々の忙しいとき有難うございました。全部の方の原稿を掲載することが出来ませんでした。誠に勝手ですが次号に掲載させて頂きます。

生　化　学　担当



助　教　授
安　西　偕二郎　先生

略　歴：

昭和43年東京大学工学部卒。昭和46年東京大学薬学部学士入学。昭和53年同学部薬学系研究科博士課程修了。同年薬学博士。東京大学医学部、東邦大学薬学部を経て昭和61年より現職。

専　攻：

生化学、細胞生物学；現在は脳の成長過程で遺伝情報の発見がどの様に調整されているかという事に関心を持っています。

抱　負：

東邦大学在職中に薬学生の教育の一端にふれる事ができました。本大学に置いても薬学教育に力を注ぎたいと考えております。諸先輩のご指導を宜しくお願い申し上げます。又、卒業研究等の機会を通じて、基礎科学の重要性を学生に伝えたいと考えております。

自己紹介：

14才の長男、2才の長女、妻一人。なかなか時間がとれませんが、山歩き等を少しします。しかし、無趣味の仕事中毒といったところが本当の所の様です。（昭和61年4月1日に着任された先生のご紹介が遅れて申し訳ありません：事務局）

薬剤学　担当

教　授
堀岡正義　先生

新任のごあいさつ

斉藤太郎先生の後任として、4月から薬剤学教室を担当することになりました。

昭和22年に大学を卒業してから、東大病院、九大病院の薬剤部に40年近く席をおき、医療畑の薬学人として過ごしてきましたが、これからはこれまでの経験を薬学教育において実践することになります。

私は薬剤師の資質が向上し医療に貢献するには、薬剤師自身の奮起と生涯教育の充実、薬剤師をとりまく医療環境の整備、さらに薬学教育における医療薬学教育の充実が必要と考えています。

最近の医薬分業の活性化は薬剤師の職能向上と社会的評価に大きな進歩をもたらしました。医療保険の診療報酬においても、投薬特別指導料、薬剤服用歴管理指導料、特定薬剤治療管理料（薬物血中濃度測定）が新設され、自己注射・中心静脈栄養輸液の調剤料、施設基準適合の病院の入院患者への投薬に対する調剤技術基本料の設定など、調剤業務の範囲拡大、技術評価、メンタルフィー重視の方向が示されました。このことは国民が中医協を通して、薬剤師にこれらの業務を付託したと受けとめねばなりません。

従来わが国の薬学教育が薬剤師の養成に消極的であったことはいなめない事実ですが、今や薬学教育の目的に謳われた「薬学に関する社会的使命を正しく遂行しうる人材の養成」のために、薬剤師としての使命感と倫理感を涵養し、薬剤師としての必要な知識と技術の教育を充実させることは焦眉の急となったといえましょう。

本学は本年4月から薬学部を開設し、30数年の歴史に新たな1ページが開かれることになりました。先任の教授の方々とご相談しながら、新しい薬学部発展のため努力していきたいと考えております。

〔略歴〕昭和22年9月東京大学医学部薬学科卒業22年12月東京大学医学部附属病院薬局入局、助手、首席助手、副薬剤部長、薬学部助教授を歴任 36年1月薬学博士38年3月九州大学医学部附属病院薬剤部長52年12月九州大学医学部教授53年4月九州大学薬学系大学院担当（医療薬学）62年3月九州大学定年退官63年4月日本大学教授

〔著書〕新調剤学、新薬論、病院薬局学,DI実例集（1～7集）、薬物血中濃度測定の実際、服薬指導、新開発医薬品便覧、今日の医薬情報（Ⅰ～Ⅹ）、最近の調剤と製剤　など多数

〔表彰〕日本病院薬剤師会病院薬学賞、日本薬剤師会賞、日本薬学会教育賞、日本薬剤学会医療薬剤学振興賞

英語担当

教　授
鈴木寿郎　先生

国際化について

最近、国際化とか国際人という言葉をよく見聞する。この言葉について英語教師として考えて見たい。何故この様な言葉が流行するのであろうか。先ず第一に考えられる事は日本の外貨準備高が増大し、貿易相手国の経済を苦境に追い込み、諸外国からJapan bashing（日本叩き）の声が大きくなり、我国が世界の孤児になるという危惧に、起因していると思われる。

事実、昨日の朝刊の経済欄には日本の外貨準備高が811億ドル余で、西ドイツを抜いて世界第一位になった事が報道されていた。これは真に慶賀すべき事である反面、貿易相手を赤字で苦しませている訳で彼等が怒るのも無理はない。昭和20年8月15日の敗戦以来、日本国民は勤勉と英知で世界が驚嘆する発展を遂げて来たが、アメリカが物資と工業技術を援助して呉れたことを忘れてはならない。そのアメリカは今日膨大な赤字に悩み、債権国から債務国

に転落しつつある。最早アメリカは過去の様に日本を援助する友好国ではなく憎悪すべき強力なrival（競争相手）と考えている。

先日の新聞ではアメリカは日本に対して、牛肉やオレンジを始めとする12品目の貿易自由化を強硬に主張し、一方　ガット［GATT］（General Agreement on Tariffs and Trade 関税と貿易に関する一般協定）に日本の高い関税を撤廃するように提訴し、黒と裁定された。更に日本の主要農産物である米に対しても自由化を迫って追い打ちをかけて来ることが考えられる。又一方建設方面では、一旦認可したワシントンの地下鉄工事でも、これを撤回し、日本の建設会社の参入を一切認めない方針を打ち出して来た。この様な日米経済戦争の不穏な状勢は、太平洋戦争前の状況と似ていないだろうか。日本の農業団体はアメリカの農産物の自由化促進に反発して、アメリカの農業経営に日本の零細な農家は対抗し得ないと強硬に抗議している。この結果は果してどうなるのであろうか。

さて本題に戻ろう。国際化が焦眉の急なのは正にこの様な危機存亡の断崖絶壁の縁に立たされているからであると思われる。日本は何故この様な事態に陥ったのであろうか。日本は250年の長きに亘って徳川幕府の治世下、泰平を謳歌し、安逸を貪って来た。そして世界の進運に取り残されて仕舞った。明治維新後、日本はこの後れを取り戻そうと必死に栄々と努力し、遂に今日の隆盛を築いたのだが、未だ鎖国的心情から脱していないのではないか。最早、日本は世界を相手に戦う意志は毛頭ないし、その力も全然ない。外国の立場を考え、自国の生きる道を探求して行かねばならない。これが本当の国際化というのだと思う。

桜薬会総会について（予告）

昭和63年度日本大学桜薬会総会を昭和63年5月29日（日）薬学部新校舎で開催します。

本年度総会は新校舎の披露も兼ねての開催となりますが、隣接地にあります薬用植物園も花一面の季節です。多数のご出席をお願いいたします。

機能形態学　担当

教　授
村　上　　元　先生

新設の薬学部で、機能形態学講座を担当させて戴くことになりました。機能形態学とは耳慣れない学問だと思われる方が多いと思いますが、要するに"Physiology & Anatomy"で機能に重きを置いて形態即ち生命の道具としての各組織（器官）を関連づけて取り扱う学問と御理解戴きたい。

近年、薬学という学問分野では、生物系の占める割合が増す傾向にあり、高校時代の生物学の必要性を痛感させられることしきりです。斯く言う私も有機合成全盛時代に薬学教育を受けた一人なのですが、そのこともあって尚その様に感ずるのかも知れません。いずれにしても、今後は、薬理学を初めとする生物系の学問が、薬学という領域において大きな比重を占めて来る様に思います。

旧制大学時代、教授が、講義をするようになった若い講師に寄席に行くことをすすめた相です。これは何も寄席で遊んでこいという意味ではなく、落語の話し方を勉強してこいという意味なのです。私も至って話し下手の方なので、この様な勉強も必要なのではと思っています。

今迄「不後悔」をモットーにやって来たのですが、後悔することのみ多く、反省しきりです。今後は、日本大学薬学部発展のために少しでもお役に立つ様なことが出来ればと念じている次第です。当面の目標としては、薬剤師教育もさることながら、三年後に迫っている大学院設置に向けて研究の方でも何とか先生方の足手纏にならない様に頑張りたいと思っています。小生、未だ浅学非才の身、今後とも皆様方の御指導、御鞭撻を切にお願い申し上げる次第です。

心　理　学　担当

助教授
中　里　　弘　先生
（群馬県出身）

私は、昭和43年に文理学部を修了したあと、山梨にあります精神科の病院に、14年程、勤めていました。その病院での主な仕事は、精神分裂症の心理療法（一般的に知られるカウンセリング）でした。

ところで、精神分裂病という病気は、一度罹患したら、治癒はほとんど期待できないと言われていました。そのため、この病気では治癒という言葉は使われず、寛解という言葉が使用されているのです。

それでも治療方法としては、薬物療法の他にも色々な治療法がなされるようになりつつあります。これは、その人が心の窓を開き、心の中を整理し、心の成長を遂げることを助ける技法です。当時、分裂病の心理療法についての評価は全くありませんでしたが、山梨ではこの治療法を進めていたわけです。

人間の心の中には直接、介入することはできませんので、治療効果がすぐに表われるわけではありません。それでも、同じ人に5年、10年と続けていく内に元気になり、自己を取り戻せるように変わっていく者も出るようになりました。こうして、全く不可能とされていた者への心理療法に成功することができたのです。

その次に扱ったものは、現代の日本を表わしているとされる登校拒否です。登校拒否もその本人の自我の再発達が進められていけば解決の方向を示すことができるようになっていきます。

以上のように、長年の間、心理療法を行なってきましたが、今年度からは大学で、心理学と学生相談を受け持つことになりました。これまでの経験は、学生相談に生かせると思っていますので宜しくお願い致します。

数　学　担当

専任講師
関　根　忠　行　先生

理工学部習志野校舎には、大学院時代また日本大学の教員になりましてからも、2～3年毎に2年間演習講義等に通いました。そのような訳で、今回薬学部に転属になり、習志野校舎に通うことに、それ程目新しい感じがしません。先日研究室の下見のために新校舎へ行きました折に、この辺りで良くソフトボールをしたな！という感じをもちました。

私の研究対象は、フラクショナル・カリキュラスとその応用です。任意階数での微分積分とその応用です。普通私達の考えているのは、自然数オーダーでの微分積分です。つまり、1階微分、2階微分、3重積分等です。それを2分の1階微分、$\sqrt{3}$ 階微分、あるいは α（複素数）回微分まで拡張しようということです。歴史は古く、1823年にAbelが用いた積分方程式の中に応用されています。ところであなたは $y=x$ の2分の1回微分はどんな式になると思いますか？

私は理工学部数学科に入り、大学院修士課程数学専攻を昭和46年に修了し、引き続き理工学部数学科に就職しました。私の趣味はいろいろ寄り道をしておりますが、今のところはスキー（全日本スキー連盟公認正指導員）に落ち着いています。

物　理　学　担当

専任講師
大　島　　久　先生

桜薬会の皆様、待望の薬学部の独立並びに新校舎の完成お目出とうございます。

私は4月1日から薬学部のスタッフの一員に加えていただき、物理学を担当することになりました。私は山梨で生まれ育ち、日大理工学部物理学科、同大学院を経て昭和51年から理工学部一般教育教室に奉職いたしておりました。従いまして薬学部は、第2番目の勤務先になるわけですが、大学入学以来理工学部の外に一度も出ておりませんので、初めての就職の様な気持ちがいたしております。今の自分の気持ちを率直に述べるならば、たぶん皆様方が大学卒業時に感じたのと同様に、前途に希望を持つと同時にいささか緊張した状態であります。12年間1年次の物理学実験を担当していながら、初期には夜間部、短大を主に見ていたこともあって、薬学の学生さん、スタッフの皆様とは縁が薄かったのですが、親切に暖かく迎えていただき感謝いたしております。先輩の教員やOBの方々によって培われたすばらしい雰囲気の中で、仕事が出来る幸福を感じております。本年度の志願者の急増にも見られますように、学生諸君の本学部への期待は高まっており、それに応える為に一教員として教育、研究に情熱を傾けなければならないと思っております。時代はいま急激に多様化し、教育に対しても従来の画一的なものからの脱皮を要請しておりますが、これは薬学においても無縁ではないとおもいます。そういった中で、いわゆる専門科目でない物理学もいくばくかの貢献が出来るのではないかと思っております。何分にも新参者でありますので、皆様方の御指導、御援助を節にお願い致します。

桜薬会会員名簿について

昨年2月に資料調査を行い10月末日に発行予定の会員名簿は事務局と印刷の手違いにより発行が大巾に遅れてしまいました。その結果、記載事実に多くの訂正が生じてしまいましたので、再度、資料調査を行ないます。同封の資料は事務局が編集に使用しているものです。誤りがありましたら、訂正のうえ、至急返送して下さい。

記載日　**4月10日現在**
資料締切　**4月30日必着**
発行予定　昭和63年5月31日

ドイツ語　担当

専任講師
山崎良介　先生

栄えある新学部に迎えられ嬉しく思います。人生における岐路はいくつもあるものです。高校・大学（学部・学科）を選択するのも、大きな岐路の一つと言えましょう。私の母の弟、つまり叔父が理工学部を卒業し、中学教師をしていましたので、付属・日大三島高校に入りました。ドイツ語を学ぼうとするきっかけは、中学時代に遡ります。2年生の時、授業中、激しい腹痛におそわれ、すぐに入院となりました。Karte の Blinddarm（盲腸）というドイツ語との出会いでした。高校では理数科クラスに席を置きましたが、文理学部独文学科に入学しました。専門科目の他に、教職課程、図書館司書課程を受講しましたので、4年次でも、1限から4限まであり、毎朝6時の小田急で小田原から通学しました。ドイツ語の教師になろうと考えたのは、4年生の半ば過ぎ、大学院の学内選抜試験があることを知ってからです。2クラス97名から3人が受験、3人とも合格しました。修士課程、博士課程へと進み博士課程在席中、付属・桜丘高校、静岡県立東部高等看護学校でドイツ語を教える機会を得ました。さて、大学院修了時、すぐに専任教員としての職がありませんでした。恩師が10年間、東大図書館で働いておられたと伺っていたので、私は、国際関係学部の図書館に司書として就職。洋書の分類、整理の他、庶務・調査・委員会・館報の編集など忙しい毎日でした。土曜、日曜は研究にあて、日本独文学会で研究発表の機会も得ましたし、テキスト（共著）2冊は、全国19の大学で採用されました。小田原の合唱団で知り合ったのが妻。1男1女の4人暮し。

職　場　往　来

カネボウ薬品株式会社

「カネボウ」という名前は、ベルのマークと共に良く御存知だと思います。では「カネボウ」と聞いて、先ず頭に浮かぶものは何でしょう……化粧品ですか、あるいはファッションですか？勿論、化粧品もファッションもカネボウの製品ですが、その他に食品と住宅、そして薬品の合わせて五つの事業部門があります。昨年（昭和62年）に創立百周年を迎えたカネボウは、この五つの事業部門によって、経営の多角化を推進しています。

カネボウ薬品株式会社は、薬品事業部門の中核として、昭和47年に傘下のふたつの薬品会社、即ちカネボウヤマシロ製薬とカネボウ中滝製薬を合併して設立された会社です。現在従業員数は約900名で医家向け及びOTCの両方の医薬品を販売しておりますが、カネボウ本体の開発力をバックとして、新薬が次々と戦力に加わり、業績の伸びは業界全体の平均値を上回っています。

またその中で、漢方薬もかなり大きなウェートを占めており、医家向け医薬品としては業界第二位、またOTC医薬品では第一位の業績を上げています。この様にカネボウ薬品は、新しい医薬品の知識に加えて、漢方の知識を併せ持つ、ユニークなディテールマンの集団となっています。

前述の如く、創立15年のまだ新しい会社ですが、日本大学薬学科出身の仲間は非常に多く、社内最大の学閥（？）を形成しています。従って勤務地も、本社及び各支店と全国に散っており、それぞれの部署で、そのリーダーとして、また中核として活躍をしています。では、どの様な面々が仲間なのか、ちょっと紹介を致しましょう。

先ず1回生の加藤克好（合成）大先輩が、福岡支店の最長老として、元気に活躍しておられます。次に少し間があいて8回生が3人、伊藤治憲（薬物）は子会社のカネボウサイエンス薬品へ出向中。樋渡惟訓（生薬）は札幌支店、菅谷栄夫（生薬）は本社で、それぞれ勤務をしております。以下、勤務地別に紹介しますと、本社（赤坂）に加藤光康（14回・生薬）、渡辺幹夫（18回・生薬）、松村暢美（31回・薬物）の3人、共にOTC部門におります。東京第一支店（日本橋）は大谷恵一（17回・薬物）、桂達郎（18回・経営）、青木三秀（19回・薬物）・加賀谷元（19回・薬物）、山下清和（20回・薬物）、小宮貴代彦（22回・経営）、大野淳（25回・薬物）、板子佳正（29回・放射）、大井雄仁（32回・生薬）と9人の大集団です。東京第二支店（大宮）に浜中敏雄（20回・生化）と大阪支店（天満宮）に鹿間好正（30回・分析）が、これは一人で頑張っています。名古屋支店（名古屋駅前）が森本嘉成（20回・経営）、佐藤正憲（22回・薬物）、尾形浩（32回・生薬）の3人で、以上21名が営業部門に所属しています。更に薬品開発部に木村修（22回・生薬）、広瀬夏美（29回・生薬）、佐藤江里（32回・生薬）と、生薬教室出身者が3人集まっています。総勢24名（内女性3名）で、その多士済々がおわかりと思います。

カネボウ薬品は、日本大学薬学科で保つとまではいいませんが、互いに競いあい、助け合って、それぞれの職場で頑張っています。

また年に一回、静岡に集まって、夜のカラオケ大会、昼のゴルフ大会に、のど自慢腕自慢を競い、同窓の横のつながりを深めています。

ぜひ本社あるいは支店の近くにこられた折には、御立ち寄り下さい。　　菅谷栄夫（38年卒）

香港便り

（UBE MARBON HONG KONG LTD）

原田貞亮

1988年は、我々桜薬会の永の夢であった薬学部昇格が実現される記念すべき年であることを心からお慶び申し上げます。

さて1985年香港に転勤、香港を中心に東南アジアNICS市場に対するマーケティングを開始して以来3年が経過しました。ちなみに私共の会社は、日本及び米国の合弁で設立された PLASTICの販売会社であり米国人、中国人、及び日本人総勢13名、シンガポール、台湾に駐在事務所を置き欧米、日本企業の海外生産拠点を主体に販売活動を行なって居ります。言葉、商習慣及び文化の異なるスタッフをまとめて会社運営を進める事はかなりの苦労がありますが、Business Like 運営出来るやり易さと楽しみが有ります。小生は薬学科卒業以来薬と無関係な業界で仕事を進めて来た為、もっか香港在住桜薬会員約2名、日本経済の国際化の波で卒業生が香港に転勤、香港支部活動を行える日を楽しみにしている今日この頃です。(注) 香港来港の折には是非声をかけて下さい。Tel 会社5－8101993、自宅3－689873

東南アジア随一の貿易港として栄えてきた香港も1997年10月1日には中国へ返還されることがきまり、もっか香港政庁では、其の準備に大童です。日本企業もここ数年で国際化推進の為香港に進出する企業が急増。その主な目的は生産拠点、資材購入、情報収集及び販売拠点等と全ての活動を網羅しています。

日本の経済活動を名実共に国際経済のリーダーとしてなしとげていく為には、本格的な海外進出が望まれます。我が桜薬会の皆様も既に国内、外で活動されていることと思いますが、薬学部としての新発足にともない、海外活動に大いに力をふるえる人材育成に力をいれる事を教授陣および大学関係者の方々にお願いしたいと思います。

香港と言うと、現在に日本人の皆様には買物とグルメの町と言った理解で、その多くは中環（セントラル)、九龍（カオルン）の人の多いごみごみした町と言った印象をお持ちの事と思います。誠に残念な事は本来の香港を理解していただける人が少ない事です。勿論香港は商業活動にはなくてはならない重要地点である事は、おわかりの事と思います。

香港は、香港島、九龍、新界及び多数の島とで形成されて居ります。新界（ニューテリトリー）には広大な土地が有り工業団地が次々と建設され、商業から軽工業へ変身しつつあること、そして既に時計生産では世界有数な輸出国になり、エレクトロニクス生産は近年急成長を遂げ香港第二位の輸出産業になっている事をお忘れなく。

香港の将来で最も重要な点は、香港に拠点を持つ事が1997年以降中国の一部に拠点を持つ事につながる事であります。

—香港豆知識—

1：総面積
　1046k㎡（東京都の約半分）

2：人口
　約540万人
　98%…中国人
　2%…米国、オーストラリア、インド、フィリピン、日本及び其の他。

3：自由市場

4：税金の安い国
　1988年4月1日より間接税の一部アップはあるが事業税18%から17%にダウン。給与所得税は16.5%から15.5%にダウン。

5：ビクトリヤハーバー
　年間の船舶入出港は年間10,000隻以上。コン

テナ処理港としてはロッテルダム港を抜き世界一（年間345万TEU以上）

6：世界各国の人々が協調して生活しているコンパクトでコンビニアンスな町。

香港駐在の間に生薬教室出身者として生薬に関係のある調査をと計画して居ります。機会があれば香港の漢方薬市場報告をしたいと考えて居ります。

（生薬 31年卒）

研究室だより

薬化学

桜薬会会員の皆様にはお元気に御活躍のこととお慶び申し上げます。私共教室員も皆元気に頑張っております。

高畠享助手は、昨年4月より1年間内地留学を許され、東大薬学部薬品代謝化学研究室で勉強中です。又、学生実習や卒業研究等の手伝いをしていただいている給費生として、62年3月卒業の野口政広さんと松下玲子さんが残られましたが、松下さんは地元群馬県の病院へ転職されました。

62年度卒研生は21名（女子4名）で、就職担当の宮尾先生のお力で就職も大部分が決定致しました。学生は3ヶ月足らずの短い期間に卒論をまとめ、現在は卒業、国家試験に向けて大いに勉強に励んでいるところです。今年も昨年度の卒業生同様、全員国家試験合格を願って居ります。

薬化学教室は来年度中に薬学部に移籍する予定で、現在引越し等準備に追われているところです。末筆ながら皆様の御健康と一層の御活躍をお祈り申し上げます。

（外山記）

薬品製造学

会員の皆様には相変わらずご活躍のこととお慶び申し上げます。当研究室のスタッフ一同は皆元気に過ごさせていただいております。

日本大学工学部の一学科としてスタートいたしました本学科は念願の学部昇格を昭和62年12月23日付で文部省から承認されました。学部発足にともない研究室内では若干の人事異動が生じましたのでお知らせ致します。

桐沢先生は63年4月1日付で学部長に就任され、また徳竹先生は63年度中に新設薬学部化学研究室の教授として移られます。従いまして両先生におかれましては当分の間、薬学部校舎、駿河台校舎間の往復でご多忙なことと思います。一方、三宅助手は4月1日付で東京大学薬学部薬品製造化学研究室へ1年間国内留学します。

昭和62年度の当教室の卒業研究生は男子14名女子12名です。昨年7月下旬には白樺湖へ2泊3日の卒業研究旅行へ出かけ、テニス、ジョギング、ゴルフ、就職に係るゼミナールなど教員、学生相互の親睦を深めました。写真はこのときのものです。3月に入り卒業研究は無事終了しました。しかし卒業をかけた総合講義試験、そして国家試験と4年生は人生の最大難関（？）のテスト浸けとなりながら各々一生懸命勉学に励んでいます。

末筆ながら会員諸氏の一層のご活躍を心からお祈り申し上げます。

（道祖土記）

衛生化学

薬学部発足の年ともなる新学年度を目前にして、何かと気忙しい毎日ですが、沢村先生をはじめ教室員一同変わらず元気に過ごしております。駿河台2号館の4階の一隅で実験をしていると、何事も変わらずここで過ごすのもあと2年足らずだとは信じ難い気持ちに陥ります。しかし変化は着実に足もとに押し寄せてきており、ここで過ごした日々が思い出の中に入ってしまう日もすぐそこにやってきています。

卒業生の皆様。折をみつけて駿河台校舎にお立ち寄り下さい。変わってゆく学校と変わらず残っているなつかしい景色の両方を記憶にとどめるために。

（立川記）

生薬学

研究室の近況をお知らせ致します。最近のおめでたいビッグニュースとしては、木村文恵助手が昨年の11月15日に御結婚され、木下姓に変わりました。ご主人は背の高い優しそうな方でした。今年度も研究室で頑張っております。昨年度給費生の木村和代さん（61年卒）は船橋病院へ、横尾朋枝さん（61年卒）は読売新聞社読売診療所薬局に、大学院生（工業化学専攻）の生沢俊朗君（60年卒）は全薬工業（株）にそれぞれ就職致しました。後任には、小林弘和、小峰茂、黒崎智恵の3君が、研究室で頑張っています。

昭和62年度の卒研生は、22名（男性11名、女性11名）が配属になり、夏の伊吹山への卒業研究旅行には、バスを使い、例年より楽な旅行となりました。

2月21日には恒例のりんどう会（幹事20期生）が私学会館にて行なわれ、百名以上の参加を頂きました。今回は木村雄四郎先生御欠席でしたが、お元気との事でした。是非、近況報告に伺って頂きたいと存じます。

末筆ながら皆様の御健勝と御活躍をお祈り申し上げます。

（北中記）

薬品分析学

会員の皆様にはお変わりなくご活躍と存じます。62年度の教室だよりを担当して近況をご報告いたします。

卒研生は男子15名、女子6名が新しく配属され、7名が各自の研究課題で実験を、他の演習者は規定の時間割による学習を後期の間それぞれ頑張りました。研修・親睦旅行は9月23～25日、伊豆半島に出かけてきました。サイクルスポーツセンター、堂ケ島、マリンパークやバイオパーク、そして車中や宿ではカラオケ大会などアトラクションが多く思いがけない才能が発揮され楽しい旅行でした。分析同窓会も12回を数え11月21日、藤原充雄会長のご尽力で東京ステーションホテルで開催され、お元気な山本純子先生はじめ多数のご参加をいただきました。今年も卒研生がご招待に預かり御礼申し上げます。もっと早い時期に設定し学生との交流も深めていただければと思っています。それから分析教室OBゴルフコンペが10月17日に行なわれ鈴木長生氏（12期）が優勝されました。このコンペも第4回となり、小林郁夫氏（10期）のお世話で春、秋の年2回が定着しつつあります。どうぞお誘い合わせ下さい。

最後に今年は教室員の移動をお知らせしなければなりません。3年半勤めていただいた竹内俊文助手が一身上の都合で3月退職されます。現在米国への留学を計画中です。又榎本節子副手と元素分析室の塚田智子さんも退職されることになり、後任として61年度卒業の新村佳世さんと木村佐知子さんが教室に、元素分析室には62年度衛生化学教室卒業の小泉明子さんが就職されることになっています。よろしくご支援の程お願い致します。

尚、分析学教室では学部への移籍、移動等は64年度以降の予定になっています。残り少ないお茶の水校舎で皆様方のお立ち寄りをお待ちしております。

どうぞお元気でお過ごし下さい。

（桃沢記）

薬剤学

桜薬会会員の皆様には各方面において御活躍のこ

とと推察いたします。

当教室員一同頑張っておりますが、斉藤太郎先生は昨年来より体調がおもわしくなく現在加療中です。伴野助手は前会報で報告しました星薬科大学薬剤学教室永井恒司教授のもとでの国内研修をおえてもどられ、昭和62年4月より教室員は、斉藤太郎教授、岡村信助教授、後藤博子専任講師、伴野和夫助手、原口真奈美助手の5名です。なお昭和63年4月より前九州大学医学部付属病院薬剤部長堀岡正義先生が本学科教授として薬剤学教室をご担当される予定です。

さて、昭和62年3月には当教室より19名（男性4名、女性15名）が卒業し、それぞれの分野で頑張っています。

また、昭和62年度卒研生は22名（男性6名、女性16名）で、夏には軽井沢へ研修旅行に行き楽しく卒研がスタートし、現在卒業論文の作成も終わり、卒業そして国家試験に向けて全員頑張っております。

いよいよ昭和63年4月より念願の薬学部が開校しますが、当教室は昭和65年4月に移りますので昭和65年3月までは駿河台校舎におります。近くまでいらした際にはお気軽にお立ち寄り下さい。

最後になりましたが、卒業生の皆様の御健康と一層の御活躍をお祈り申し上げます。　（原口記）

薬　物　学

桜薬会会員の皆様には、各方面でお元気に御活躍のこととお慶び申し上げます。私共教室員も卒研生とともに元気で頑張っております。

教室員の移動としては、三輪高市君の後任として、62年3月卒業の福田由美子さんが4月より給費生扱臨時雇として勤務されましたが、12月に退職され、現在は赤羽病院の薬剤部に勤務されています。また現在留学中の伊藤助手は本年6月30日までの2年間の留学期間を本年9月30日まで延長になりました。草間専任講師は、本年4月より新薬学部の機能形態学研究室に所属替えとなりますが、薬学科の講義・実習は引き続き担当します。

学会関係では、第10回国際薬理学会（オーストラリヤ；シドニー）並びに国際麻薬研究者会議1987（同；アドレイド）出席のため、村越先生が8月23日より9月4日まで、また12月2日より12月9日まで、ハワイのホノルルで開かれた日米合同薬学大会で発表のため、村越、牧村両先生が出張されました。以下に本年度の学会発表を紹介します。

○オピオイドによる蛙脳のadenylate cyclase の阻害（石毛、牧村、村越・第60回日本薬理学会総会、S62.3.30.）

○回虫HADH要求性fumarate reductaseの性状－Rodoquinone の関与について（井熊、牧村、村越・日本薬学会第107年会、S62.4.2）

○モルモット回腸の急性禁断収縮について（草間、牧村、村越・第76回日本薬理学会関東部会、S 62.6.7.）

○Mechanism of the anthelmintic effect of Bithionol （Y. Murakosi, K. Ikumura, M. Makimura・JUC Pharm Sci 87 、S62.12.6.）

その他、教室関連の催しとして、第13回薬物同窓会が62年6月20日に、箱崎シティーターミナルビルで来賓7名を含む147名が参加して開催されました。また、61年度卒研生17名は、全員卒業・全員国家試験合格を果たし、62年度卒研生25名も先輩に続くと日夜奮闘中です。

最後に、桜薬会会員の皆様の一層の御健勝と御発展をお祈りします。　（草間記）

薬　品　物　理　化　学

桜薬会会員の皆様には各方面で益々御活躍のこととお慶び申し上げます。

教室の近況についてお知らせ致します。給費生の滝沢純子さん（31期）が62年10月に退職され、62年4月より小森雄太（62年3月卒業）が勤務しております。

昭和62年度卒研生は、男性14名、女性7名と当教室としては珍しく男所帯となりました。9月には志賀高原へ卒研旅行に出かけ、大いに親睦を深めてまいりました。卒業論文の提出も済み、現在は国家

試験に向けて頑張っています。

佐藤孝俊教授、斎藤好広助手は日夜、教育、研究に励み、4月からの薬学部設立準備にも追われる毎日をおくっています。

教室の教育と研究成果も着実に前進しておるものと思われますが、今後とも先輩各位の御協力を心からお願い申し上げます。（小森記）

薬事・経済学

当研究室の近況をお知らせします。昭和62年度の当研究室の卒研生13名は全員卒業し、大手製薬企業、大病院、都庁等にそれぞれ就職も決まり、目下、全員国家試験合格をめざし、先輩の後を継ぐべく頑張っています。

一方、研究室は、前年と同様、少ない陣容ではありますが、学会発表や、国よりの多くの委託研究を引き受けるなど精力的な研究活動を続けております。

また、4月よりの新たな薬学部の新設に当たっても、他大学に類例なき、この薬事分野の管理学的研究を実践する研究室として、益々その存在価値を高めるべく研究室員一同努力している所であります。

なお、当研究室の新薬学部校舎（習志野）への移転は、昭和65年4月からなので、それまでは従前どうり、駿河台9号館6階ですので、お近くにお寄りの節はお立ち寄り下さい。（中村　健記）

微生物学

桜薬会会員の皆様には各方面に御活躍のこととお慶び申し上げます。

小山先生には62年4月より教授に昇格され、ますます多忙な毎日を過ごしておられます。5月にはお茶の水のホテル聚楽において、沢村先生ご夫妻をはじめ生化学、衛生化学、微生物学研究室の卒業生を中心に百余名が出席し、「小山新教授を祝う会」が開かれました。小山先生御一家を迎え、発起人代表荒井美明氏の挨拶に始まり、回顧談やら新薬学部の話やらであっという間に時が過ぎ、最後は小山、沢村両先生の胴上げで賑やかに散会しました。

62年度の卒研生は11名でいずれも劣らぬひょうきん者ぞろいです。9月には軽井沢で雨中の大テニス大会や、急遽催された仮装大会など大いに楽しんでまいりました。その彼らも今や真剣な面もちで国家試験に取り組んでいます。

新薬学部の開設まではや一ヶ月足らずとなり、研究室移転の準備等あわただしい毎日ですが教室員一同元気で頑張っております。新学部は理工学部習志野校舎野球場跡ですので折がありましたら是非お立ち寄り下さい。

末筆乍ら会員諸兄姉の益々の御健康と活躍をお祈り申し上げます。（井口記）

駿河台コミュニティー

第2回『7期同窓会』開催される

昭和57年7月　　あれから5年。昭和62年7月12日、第2回目の「7期同窓会」が開催された。

場所は、大正の名残を今に留める東京ステーションホテル二階の大広間であった。前回の山の上ホテルとは多少趣を異にしていたと言えよう。出席者は、前回と略々同数の八十余名であった。しかし、出席者の約半数が、初めての参加であったことが、特長であったといえるかも知れない。

会は、木村先生のご祝辞を皮切りに桐沢主任教授による現況報告、そして各来賓のご挨拶と進み、次第に盛り上がりを見せて言った。集まった人達との間で、久し振りに会う恩師、級友達との談笑が、グラスを片手に始められた。話は一気に、在学当時に遡り、往時のエピソードに花が咲いた。そしていつ

しか現在の状況話等々、食べ物、飲物を口にする暇さえない様に見えた。会場には、終始エレクトーンの調べが、ほろ酔い加減の耳を快く刺激していた。雰囲気は、いやが上にも盛り上がり、いよいよ佳境に入っていった。その日のスナップ写真を撮るためのフラッシュが、あちらこちらで閃き続けていた。会が始まってから、およそ二時間余りが過ぎた頃であろうか、中村先生が音頭をとると、会場に一つの人の輪が出来た。これを境に、エレクトーンの演奏は、これ迄のムーディーなものから「日大節」になった。これがたちまち合唱の波となり会場を包み込んでいった。引き続いて「日大応援歌」、「若きエンジニア」と在学中に口遊んだメロディーが、我々を頂点へと押し上げて行った。この頃には、先程の輪もさらに大きく膨らみ、その輪は、右に左にと揺れ動き、歌声も一段とトーンを上げていった。全員が一つになり、将に最高潮に達し、しばしその雰囲気に酔いしれていた。

やがてパフォーマンスも終わり、全員による記念撮影が済み、余韻を残しつつ閉会へと向かった。この後、二次会が、東京駅構内のパブにて用意されていた。二次会には、殆どの人が参加し、いまだ醒めやらぬ興奮に、談笑は続いた。やがて解散の時は来た。幹事による終会の挨拶に、次の再会を約束し合いながら、夫々の席を離れ帰途についた。

本会が、一時的とは云え若き青春の息吹を蘇らせ、多くの友と再会が出来た喜びを与えられた事は、誠に意義あるものと考える。

なお、ここで筆を置くにあたり、物故者のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。(合掌)

(小森谷記)

卒業20周年を迎えて

12期生

昭和62年9月20日の日曜日、新宿の京王プラザホテルで、私達第12期生の卒業20周年記念同窓会を開催しました。当日は天候にもめぐまれ多数の仲間が集まり、20年ぶりの再会に話がはずみました。この日のために各卒論教室毎の幹事が約1年前から種々の計画をたて準備してきました。そのかいあってか、北は北海道から富良野の蓮川君、札幌の森山さん、函館の青木君、南は山口から出口さん、広島の熊高君、神戸に転勤したばかりの野沢君、石川からは安田さんをはじめ72名の出席者がそろいました。まずまずの人数だったので幹事の一人としてホッとしました。会の開始前に懐かしい11名の先生方と一緒に全員で記念写真をとってから、桜井君の司会進行で会が始まりました。この日わざわざ卒論旅行から駆けつけて頂いた主任教授の桐沢先生のご祝詞のあと歓談に移りました。会場内にはあちらこちらで楽しそうな輪ができ、20年前以上の懐かしい思い出を語り合っていました。昔の顔つきとまった

く違ってしまった人や20年前とほとんど変わらない人もおり会場内は懐かしさで満ちていました。会の途中では、出席された教授の先生方より近況を話して頂きましたが、特に桐沢先生からは昭和63年春に開校するはこびになった『薬学部』の概要について解説して頂きました。また卒論毎に先生を囲み写真をとったり、当日出席できなかった会員の近況を書いた通知状を回覧しました。会終了前、次回の幹事長に小清水君が選出され同君より本会の名称を『日大薬学科第12期生会』とし5年後に再びこのような会を開催したらどうかの提案があり全員拍手でもって賛同しました。午後3時半過ぎ、鈴木君による何年振りかの日大節を声高らかに歌い、東君の世話による2次会場へと向かいました。今回の開催については幹事全員の協力がありましたが、とりわけ住所録の作成に力を注いだ兼子君、多方面への連絡や写真等を整理してくれた小野さん、また全体をうまくとりまとめてくれた小清水君に深く感謝します。　（古池輝久）

卒業30年記念クラス会

2期生

我々、2回生が日大工学部薬学科に入学したのは28年4月で翌29年に世田谷、三島、農獣医学部の教養課程から駿河台の工学部校舎で一同に会したのだった。薬学科が出発して2年目で、我々が日大薬学科の将来を担う人材になる事を思い、大変はりきっていた時代であった。先生方も若さと情熱で活力ある授業内容で、とかく怠けがちな我々を引っ張って頂いた。しかし設備は十分とは云えず工業化学科で分析実験など間借りし、又器具なども我々で揃えなければならなかったが、ともかく団結力が強く充実した4年間だったと思う。特に工学祭の仮装行列には多数が参加して神保町などを歩き回ったことは忘れられない。32年に卒業し各方面にわたってそれぞれの花を一つ一つ咲かせ今日に至って来た。昨年卒業30年を記念してクラス会を行なおうという事で在京の仲間に呼びかけて黒瀬、佐藤（壮）、重本、高木、高山、鶴田、宮尾、石黒が集まり、何回か話し合ううちに色々とアイデアがでて多少にぎやかだったが楽しんでもらえたと自負している。会を催すにあたり名簿の整理から始まったが桜薬会事務局の好意により名簿を頂くことができ大変助かった。しかし転勤其の他で意外に移動があり整理するのに時間がかかったが、クラスの方々からの連絡により一部の人を除きまとめる事ができた。それから黒瀬さんにより銀座第一ホテルを11月15日（日）予約することができ2回生のクラス一同に呼びかけた。当日は7・5・3の日に当たり、欠席または保留というのがあり最後まではっきりしない状態で会計担当の高木君と色々検討したものだった。 しかし当日になり、思いもかけない方々の出席もあり総勢75名の大

変盛大な催しが出来た事はクラスの人達の友情のたまものだと思う。また桜薬会からもお祝いを頂いた。

当日は恩師の方々も沢村先生をはじめ中村、辰野、高村、宮尾、山本先生にご出席頂き学生時代と少しも変わらぬお元気なお姿を拝見でき、また我々クラスの人達も外観はともかく、話しているうちに30年前にもどった気分で3時間という時間が大変短く感じられた。しかしすでに7名の方々が亡くなられておりその点が大変残念だった。

当日は佐藤（壮）君の努力でコロンビアからコーラスグループを提供してもらい会を盛り上げてもらったが最後にコーラスグループの発案により日大の校歌を皆で歌い次回は我々も長くはないのでなるべくはやく開催することを決めて解散した。

（幹事代表　石黒文夫）

支部会だより

千葉県に「桜葉会」誕生する

これは本学薬学科が薬学部となって千葉県習志野市に開校することから結成されたもので、千葉県内の病院・診療所・調剤専門薬局・官庁関係に勤務し本学薬学科を卒業した者を正会員、又製薬企業や卸関係に勤務している場合の賛助会員から構成されている（他に特別会員制あり）。この初会合が昭和63年2月20日午後4時より千葉京成ホテルで開催された。当日は会員数47名中22名が出席し、設立説明や会則・役員等の承認の後、特別講演として9期生である前厚生省薬務局審査第2課長の小宮宏宣氏（現日本薬剤師会）による「薬剤師をとりまく諸問題」という誠にタイムリーで有益な講演を聞くことができた。今後は年2回ぐらいの気楽な集まりを考えており次回の予定は今秋である。会長は2期生の木下正美氏（国立下総療養所薬剤科長）。入会ご希望の方は会長まで申し込みして頂きたい。

（文責　小清水）

事務局だより

昭和62年度　総会報告

給水制限が行われている最中の雨の金曜日、昭和62年7月3日17時30分より東京湯島にある東京ガーデンパレス「桂の間」に於て、君島正彬氏（5期）氏司会のもとに、通常総会が開催された。

開会の辞（司会）、会長挨拶（高仲　正氏）、に続き、議長渡辺和子氏（9期）書記青木正忠氏（8期）鈴木長生氏（12期）が選任された。

議事は会則に従い、審議され、別記原案通り承認されたが有吉歌子先生より退職にさいし記念として20万円のご寄付を頂き桜薬会基金に繰り入れられたことも紹介された。

総会終了後　別室「扇の間」に移り会長挨拶のあと名誉会長桐沢　誠薬学科主任教授より薬学部設置につき経過報告があり、併せて桜薬会会員の協力方の要請があった。小川昌保氏（3期）による薬学科と桜薬会発展を祈願した発声による乾杯と共に懇親会が開かれた。

〈議事録抜粋〉

庶務報告

○会　員　数　（昭和62年4月1日現在）

	名	前年比
正会員	6,372	+213
学生会員	905	− 10
特別会員	37	+ 1
準会員	0	0
合　計	7,100	+193

○役　員　会

理　事　会　3回開催

委　員　会　5回開催

○支　部　会　合　他

有吉先生に感謝する会 61. 6. 1

於　東京都「京王プラザホテル」

高仲会長、桐沢先生　他 425名

1期生卒業30周年記念クラス会 61.10.19.

於　東京都「じゅ楽」

高仲会長、桐沢先生　他 60名

11期生卒業20周年記念クラス会 61.11.16.

於　東京都「ホテル・グランドパレス」

高仲会長、桐沢先生　他90名

鳥取県支部 61. 9.13.

於　鳥取市「ホテルニューいなば」

中村副会長、沢村先生　他　　名

国家公務員支部 61.12. 6.

於　東京都「今佐本店」

高仲会長、沢村先生　他 25名

事業報告

○会報発行

号　　数：桜薬会会報11号

発 行 日：昭和62年3月25日

発行部数：6,500 部

○会員資料の整備

新 規 登 録：213件　前年比　+10件

記載事項訂正：2612件　前年比 +1663件

○会員名簿（昭和57年版）追補の発行

追補［4］：昭和62年3月25日現在

卒業生213名収載

○就職斡旋

求　　人：33件　前年比 +3件

○地方支部会の開催

庶務報告の通り

○学生会員活動補助

就職説明会：2回開催（4年生）

薬学科スポーツ大会：1回開催（全学年）

卒論対抗ソフトボール大会：1回開催（4年生）

懇　談　会：1回開催（1年生）

財務報告

昭和61年度決算報告

61.4.1. ～62.3.31.

○収入の部

	予算	決算	増減
年会費	3,700,000	3,184,000	－516,000
工科校友会部会費	150,000	132,500	－17,500
工科校友会割戻金	200,000	276,000	76,000
利子	250,000	280,956	30,956
雑収入	100,000	210,500	110,500
前年度繰越	891,527	891,527	0
合計	5,291,527	4,975,483	－316,044

○支出の部

	予算	決算	増減
印刷費	1,400,000	834,500	－565,500
通信費	1,200,000	1,627,357	427,357
人件費	350,000	625,013	275,013
旅費	250,000	0	－250,000
会議費	250,000	196,600	－53,400
支部等活動補助費	200,000	90,000	－110,000
学生会員活動補助費	200,000	200,710	710
事務局費	200,000	198,305	－1,695
名簿積立金	300,000	300,000	0
雑費	200,000	80,400	－119,600
予備費	741,527	200,000	－541,527
次年度繰越	0	622,598	622,598
合計	5,291,527	4,975,483	－316,044

○前納会費積立

	定期預金	件数	年会費
昭和62年度分	2,316,000	(1,158	×2,000)
昭和63年度分	1,894,000	(947	×2,000)
昭和64年度分	1,554,000	(777	×2,000)
昭和65年度分	570,000	(285	×2,000)
昭和66年度分以降	198,000	(99	×2,000)
合計	6,532,000	(3,266	×2,000)

○預貯金

	定期預金	利子	合計
基金	3,880,000	561,994	4,241,994
名簿積立金	3,395,400＊	212,986	3,608,386
合計	7,275,400	774,980	8,050,380

＊工科校友会名簿補助金 ¥1,400,000 を含む

○次年度繰越金

	普通預金	振替貯金	合計
次年度繰越	422,758	199,840	622,598

監査報告

昭和62年6月27日

日本大学桜薬会
会長 高仲 正 殿
日本大学桜薬会
監事 小清水 敏昌 印
監事 栗山 衛 印
監事 片桐 憲一 印

監査報告書

昭和61年度日本大学桜薬会の収支決算書について監査の結果、適正なものとみとめます。

以上

会則変更案

現行会則

第7条3.

・・日本大学理工学部薬学科に勤務する者から6名以上10名以内を選出し会長が推薦する。

改正案

・・日本大学理工学部薬学科に勤務する者から10名以上理事総数の10％以内を選出し会長が推薦する。

事業計画案

○会報発行
○会員資料の整備
○会員名簿（昭和62年版）の発行
昭和62年10月1日現在

正会員、特別会員　計6,200名　収載
本文　約400頁　1000部印刷
○就職斡旋（求人・求職）
○地方支部の設立及び懇親会の開催
○学生会員活動補助
就職懇談会補助
スポーツ大会補助
○薬学部昇格にかかる協賛事業について

予算案

昭和62年度予算案　62.4.1.～63.3.31.

○収入の部

	当年	前年	増減
年会費	3,700,000	3,700,000	0
工科校友会部会費	150,000	150,000	0
工科校友会割戻金	200,000	200,000	0
利子	150,000	250,000	−100,000
雑収入	100,000	100,000	0
前年度繰越	622,598	891,527	−268,929
合計	4,922,598	5,291,527	−368,929

○支出の部

	当年	前年	増減
印刷費	1,400,000	1,400,000	0
通信費	1,200,000	1,200,000	0
人件費	350,000	350,000	0
旅費	250,000	250,000	0
会議費	250,000	250,000	0
支部等活動補助費	200,000	200,000	0
学生会員活動補助費	200,000	200,000	0
事務局費	200,000	200,000	0
名簿積立金	300,000	300,000	0
雑費	200,000	200,000	0
予備費	372,598	741,527	−368,929
合計	4,922,598	5,291,527	−368,929

役員承認

任期　62.4.1.～65.3.31.

別掲

会務報告

◎　理事会　62. 5.26.　於　薬学科会議室

出席者　会長：高仲、副会長：笹野、前田、事務局長：山内、理事：31新村、木下、32鶴田、33小川、大庭、毛利、37藤原、39勝木、42鈴木、荒井、43高橋、44西村、45本吉、53熊井、61原、62石井、鈴木、椎名、学内、岡村、小山、椛沢、内倉、小池、井口、井熊、　以上29名

審議事項

1. 昭和62年度通常総会について
総会資料につき討議の結果、役員名簿を除き承認。役員名簿は総会前の理事会に付議することに了承。
2. 役員選出について
各期選出常任理事に一任する事とした。
3. 薬学部推進特別委員会について
免税措置について国税庁の見解を報告し、募金については特別委員会に付議することとした。

◎　薬学部推進特別委員会　62. 6.19.　於　薬学科会議室

出席者　会長：高仲、副会長：笹野、前田、事務局長：山内、理事：31新村、32鈴木、33小川、中村、35君島、37藤原、39渡辺、40坂田、41鈴木、42鈴木、61原、62学内、岡村、小山、椛沢、青木、内倉、小池、井口、井熊、　以上23名

審議事項

1. 募金活動について
日本大学100周年記念事業の募金活動に賛同する事にし、大学側の行動を待つこととした。

◎　理事会　62. 7. 3.　於　東京ガーデンパレス

出席者　会長：高仲、副会長：中村、前田、事務局長：山内、理事：33小川、毛利、35君島、36松島、玉田、藤本、37藤原、39渡辺、40坂田、小林、42鈴木、44西村、45本吉、黒河内、平川、48樺島、49布目、56大賀、長岡、松村、61原、62学内、小山、徳竹、椛沢、青木、道祖土、井口、井熊、山内、小池、　以上34名

審議事項

1. 新役員について
各期選出常任理事より提出された名簿を承認した。

◎ 理事会 62. 7. 3. 於 東京ガーデンパレス
出席者 会長：高仲、副会長：中村、前田、事務局長：山内、理事：33小川、毛利、35君島、36松島、玉田、藤本、37藤原、39渡辺、40坂田、小林、42鈴木、44西村、45本吉、黒河内、平川、48樺島、49布目、56大賀、長岡、松村、61原、62学内、小山、徳竹、椛沢、青木、道祖土、井口、井熊、山内、小池 以上 34名

審議事項
1.新会長選出について
理事互選により新会長として高仲 正（2期）を選出し、同氏の承諾を得て、総会に上程した。

◎ 理事会 62.10.23. 於 薬学科826号室
出席者 会長：高仲、副会長：中村、前田、事務局長：山内、理事：31大林、新村、木下、分林、32鈴木、鶴田、33小川、中村、毛利、34小倉、35鈴木、36藤本、37藤原、小山、38石川、畑中、39勝木、渡辺、41灰原、42鈴木、桜井、43熊井、45黒河内、本吉、46田口、47国井、48大河内、樺島、51河村、鈴木、学内、岡村、小山、長谷川、青木、内倉、道祖土、北中、小池、本橋、井口、三宅、石毛、 以上 47名

審議事項
1. 委員会について
つぎの委員会を設置することとなった。
総務委員会 委員長 中村副会長
財務委員会 委員長 前田副会長
事業委員会 委員長 笹野副会長
薬学部推進特別委員会 委員長 高仲 会長

2. 桜薬会の運営について
従来の桜薬会に新薬学部卒業生も含めた校友会とし、会員は工学部薬学科、理工学部薬学科、薬学部の出身者で構成することにし、会則変更については総務委員会が検討することとなった。

3. その他
事務局に専従者を雇用することとし、新学部に事務室を設置できるよう大学に要請することとなった。

◎ 常任理事会 62.10.23.
於 薬学科826号室
出席者 会長：高仲、副会長：笹野、前田、事務局長：山内、理事：31新村、分林、32鶴田、33小川、中村、42鈴木、44岸田、50草間、53熊井、61原、学内、小山、椛沢、長谷川、内倉、道祖土、北中、井口、三宅、石毛、 以上 23名

審議事項
1. 昭和63年度桜薬会総会および運営について
開催日：5月29日（日）
会 場：薬学部新校舎
運 営：総会後、懇親会を学生食堂で開催し、併せて校舎、施設の見学をする。

2. 委員会について
委員の選出が遅れ、委員会の活動が停滞しているが、各委員長に早期選出を要請し、委員会編成までの事務事項を事務局が代行することを了承した。

会費納入報告

財務委員会

会費を納入していただきました会員の方々の名簿です。御協力ありがとうございました。誤りがございましたらお知らせください。

（昭和62年1月1日～昭和63年2月20日）

会費納入者

昭和61年度会費納入者
40 豊田富士子 以上1名

昭和61～65年度会費納入者
34 有本享 42 小池恭司 46 渡辺幸枝 48 福地幹男・牧原まさみ 以上5名

昭和62年度会費納入者
31 加賀谷進二・私市小夜子・兵藤精一・村松敬介 32 石橋義弘・石渡康保・鈴木康雄・羽布津雅子・山本八栄 33 鍛冶智恵子・金子佐知子・立花礼子・戸巻博・戸巻美奈子・中沢悦子・前田和徳 34 木村清・島峯望彦・鈴木信子・高梨久美子 35 斉藤文夫・杉崎敦子・高野俊彦・高橋恭子 36 安藤邦夫・磯部武・岩瀬光江・江花恭子・小林和子・坂本寿子・高橋洋行・辻厚子・根岸ふき子・福田福男・藤井和子 38 工藤祐江・後藤博・樋口美智子 39 金子幹宏・河野淑・代田勝彦・広瀬慶子 40 佐藤富子・佐藤良夫・高田定一・丹野資弘 41 安倍千明 42 青木恵美子・青木邦夫・原正紀 43 赤松

俊明・香山美子・今井俊子 44 篠村真理子・根本志珠 45 田村杜詩子 46 児島紀子・坂口悦子・渋谷正・根本勝男・山本哲朗 47 水谷告 48 富沢恒夫・柏村豊子・横田修・吉田広英・渡辺光 49 内海秀子・大谷真理子・斎藤晴美・西田美好・平野順子・藤田敬子 50 浅井敬代・車吉誠・山崎枝子 51 片桐秀明・鈴木孝・高田義郎・松川律子・森田哲生 52 奥山靖子・種井政春・藤田智子・山口文恵・渡辺加奈子 53 浅野明美・阿部健一・上田忠司・奥山弘明・古川久代・松本正子 54 砂堀みどり・中野あつ子・三浦博子 55 笠原安輝子・加藤彰裕・田中香代子・広松典子・増野浩 56 大野扶美子・仙名生代・橋本滋子・加藤純子・平間多美代 57 川村恭子・中村宏典 58 三浦恵吾 59 河本雅夫・三浦久美子・阿部秀夫 62 豊巻則人　以上118名

昭和62・63年度会費納入者

32 松江信佳 34 山田茂 36 富田貞子 38 小林静子・鈴木昇・早川紀代子 39 亀山伸作 41 大河原明子 47 片岡孝子・鈴木直子 48 井上節子・樺島順一郎 52 山本かおる 54 沢島千恵子・田辺浩二 56 富永博之　以上16名

昭和62～64年度会費納入者

33 徳竹伯夫・徳竹喜子 45 福野剛樹　54 松本明美・松本道明 57 田嶋美智子　以上6名

昭和62～66年度会費納入者

31 足立卯子・飯田龍男・荻原千恵子・穐山たつ子・黒田幸一・狐塚識夫・狐塚治子・合木淑子・斉藤美智子・志村進一・神保恵美子・陶山順子・高橋実・高山佳子・長島幸子・平田享・藤本澄以・宮田節子・室屋英幸・室屋弘子・森山芳昭・吉沢秀明 32 赤坂洋子・吾妻慶子・石黒由美子・金井かほる・沢野俊彦・高山茂・田丸規子・冨田修・中山純雄・能登和男・平山薫・松岡茂樹・宮尾清三・宮尾洋子・米光幸子 33 内田朝子・江畠義文・大川和子・軽部玲子・清本和子・雑賀昭助・雑賀定子・佐藤雅子・鈴木雅・福田静江・藤野睦男・森佳子 34 岩田久恵・遠藤節子・椛沢洋三・国友玲子・小泉規子・高橋周七・富塚隆・中本光子・牧野一郎・三原治子・宮野正弘・山内盛・山本啓二・吉田久子 35 碓井貞弘・大山由布子・上甲時子・戸田雅恵・豊田亮三・原田陽子・本多寿子・安田黒枝・山内育子 36 栗原武久・小林陽三・清水紘子・武信貞夫・塚本吉紀・根本圭二・長谷川生子・福田敬子・藤井綾子・本多務・三股早代子・三股輝夫・山崎スミ子・若菜茂二 37 小原節朗・上谷知子・木村和子・栗原俊子・小嶋雅子・昆由紀子・寺山育子・二川博子・安田園子 38 伊藤進・伊藤益宏・今川民子・大野比奈子・広畑明子・小倉允子・折茂洋子・梶原温子・形浦和子・君島小枝子・銀林妙子・国領文子・高松田鶴子・豊島清麿・波間美佐子・宮本頼章 39 大井寿子・大関康子・小野沢弘子・北澄潤子・栗原康子・小松康宏・高尾正美・竹内節子・長沼邑子・渡辺和子 40 磐井和子・内山勲・浦野博・岡田典子・久保岩次郎・黒川和子・小林郁夫・近絢子・高橋捷泰・筒井力彦・中井温子・西井和彦・牧野弘子・森博彦・山川貴子・横井幹枝・和栗正子 41 伊藤祐子・稲垣英夫・岩瀬広・大貫秀実・大野久美子・岡崎そのえ・折原俊巳・城之内マサ・関根和子・関元喜久子・千葉良子・時田真人・長谷川寿男・藤田博子 42 石倉芳夫・新仏賢明・鈴木長生・蘇原美智子・原典子・平野孝子・松波紀子・水吉清恵 43 相場典昭・大津賀睦子・小野里和子・菊谷由己夫・佐々木真澄・釘宮道子・高島友子・宮田宏子 44 井関知子・須賀正道・杉山信子・瀬尾健一・中山謙二・西村友則 45 有田三津代・石井久夫・工藤ナツ子・永田光信・平田慎一・平場美美代・鎗田一子 46 小儀国太郎・小林正子・佐々木孝敏・宍倉清・篠崎俊行・成川秀隆・山内慶一・山内ヒロ子・吉田雅子・渡辺治子 47 大塚直・小川康子・今正嗣・神名照幸・鈴木ひろみ・関修・関けい子・中村光一・名塚登美子・二俣哲夫・前島裕子・宮本俊男・森川邦子 48 青木豊美・飯塚栄一・稲垣節・池田紀代美・佐藤光洋・嶋村美知子・仲野克俊・高橋啓子・山根典子・坂巻光子 49 石川久美子・伊原千秋・香坂瑞代・佐藤恵美子・鈴木雅富・槇枝博文 50 大蔵秀喜・草間国子・斉藤和康・立石慎一郎・土井正道・根本睦子・原田善美・坂悦子・横山としよ 51 浅井三千子・進藤美和子・大川則行・熊谷泰二・中宮章憲・本橋重康・吉田晴子 52 上田貴久子・内田茂・内田千恵子・荻原洋志枝・鍵原知子・関山明・関山洋子・西沢良子・平野和子矢口澄江 53 内山隆・神部恵津子・木村郁郎・杉山裕茂・松本修・目黒徹・横山亮一 54 大塚一記・大橋教子・岡崎至正・岡山得秀・君島真知子・伊藤昌美・杉山昌子・大川葉子・佐藤芳久・牧野宏・増田修也・増田留美子・三浦安寿・三浦良江・村山瑛明・米倉明 55 秋元幹夫・梅沢芳史・川口英美・上条増富・市原純子・北山純子・二宮恵子・白花勝・須藤淳二・長山幸太郎・南雲恵子・平井久雄 56 蓮池由起子・石田悦子・山本洋子・古川明子・佐藤明広・神宮由幸・杉浦知弥・伊藤美智子・田中良子・玉置邦彦・富田晴美・松村昇・工藤純子・八東京子・渡辺一樹 57 五十嵐寛能・加藤綾子・柴崎規子・大川博・蛎崎淳・吉川日出雄・葛谷美穂・久米実・福重潤子・田村悦子・伊藤麻里・田内悦子・信平智雄・北原さつき・服部雅・馬島潔郷 58 刑部万里・小長谷栄一・須賀智代・菅尾高裕・荻原秀美・若宮紀子・長井一彦・目崎純子 59 飯島勝夫・岸田朋子・土屋雅美・佐藤義人・三原真奈美・宮野慎也 60 庄子清隆・金奎晩 61 王誠明 62 青木一夫・青木理恵子・秋山清子・朝原道子・安達和美・穴沢章匡・飯田淳・飯田雅子・飯田真由美・飯野雄二・池田保夫・石井武男・石井直子・伊藤温子・伊東椎佳子・伊藤直子・稲しのぶ・稲垣典子・井上温美・今井豊・今田詩子・岩田東・岩爪昭子・上松典雄・臼倉勉・江口香枝子・枝川万千子・大井雄仁・大沢香織・大園和代・大塚千尋・大屋享子・小川裕子・小沢恵美子・小原一啓・小俣雅義・加賀公・勝浦啓子・勝又彰子・勝又昭宏・加藤要子・金森明子・金子恵子・金子典代・金子有紀子・神恵子・神尾ふくみ・香山文明・岸哲也・吉城寺秀文・木村あづさ・木村寿子・櫛田瑞弘・楠聖樹・窪寺泉・久米隆夫・洪沛勇・小菅孝恵・小林清美・小林弘和・小峯昭子・小村千尋・小森雄太・近藤雅信・後藤孝・三枝耕一・斉藤薫・斉藤陽子・佐久間竹志・桜田泰仙・佐々木美和・佐々木泰子・定永正子・佐藤江里・佐藤智子・佐藤直仙・椎名宏吉・島田真理・清水一洋・清水芳子・下和之・城田修・城野貴江・鈴木純子・鈴木弘孝・鈴木豊・瀬賀新栄・関田真奈美・瀬戸英之・高田浩子・高橋久美・高橋正直・高橋麻美子・瀧本啓・立川洋子・田中理恵子・田中里佳・店橋勇・玉木典子・田村幾代司・田村雅美・田村泰紀・丹野由美・蠹悦子・月井英喜・月岡隆・鶴美和子・鄭和明・寺尾真穂・徳村広美・中台俊之・中村弘造・中村孝臣・中村範子・中村美喜代・中村裕美・永喜美和子・永沼紀子・鍋島香里・並木陽子・奈良恵美子・新村佳世・西川辰恵・西谷幸久・新田哲子・根本治雄・野口政広・萩川裕子・橋本一成・長谷川裕子・長谷川美佳・花見聖一・林由紀・早瀬晴美・原伸子・平井菜穂子・平野理子・平野美保子・福島栄・福嶋真由美・福田由美子・藤田玲子・星野尚子・細田恵子・堀田晴理・堀井勝徳・堀内誠一・堀江摩美・堀越東・本田雄子・前川奈緒美・前島一恵・前原友子・増山仁・松下玲子・松戸久美子・松橋陽子・松前みどり・松村貴久司・水谷かおる・壬生弘子・美馬斉・三輪美絵・武藤千里・村瀬雄也・村山真由美・目良三知・望月淑子・百瀬将人・森啓子・森由香里・森谷育子・柳沢由美子・柳田智子・山口晃・山下佳美・山田英輝・山中利仁・弓削充正・吉田美由喜・吉本泰司・米沢義雄・若松伸明・井上久美・岩本和久・加藤貴久・黒崎智恵・小峰茂　以上518名

昭和62～71年度会費納入者

34 新村節子 36 後藤立子 43 鎌田淑子 44 荒尾美沙子 54 松島利恵子 55 藤井令子　以上6名

編集後記

◎12月23日に薬学部設置が確定してからの時間経過は普段の10倍ぐらいのスピードでしたが、事務局の独断で何とかこの会報を編集することができました。4月からは、新学部と共に桜薬会も新しい局面を迎えますが会員諸兄姉の期待に答えられる様、会則変更されます。御協力を御願い致します。

◎会報は皆様のものです。投稿を御願い致します。

発行日　昭和63年4月2日
編集人　日本大学桜薬会事業委員会
発行人　日本大学桜薬会会長　高仲　正
印刷所　白洋印刷KK 電話東京352－5631・9667
発行所　〒101 東京都千代田区神田駿河台1－8
日本大学理工学部薬学科内
電話東京293－3201 振替東京2－50025

桜 薬 会 役 員 名 簿

任期　昭和62年4月1日 ～ 昭和65年3月31日

会長	高仲　正	32年卒
副会長	中村　健	33年卒（学内）
	笹野英雄	34年卒
	前田敏晴	36年卒
事務局長	山内　盛	34年卒（学内）

理事　※印：卒業期選出常任理事　§印：会長指名常任理事

昭和31年卒	石田隆夫※	大林　温§	木下　肇§	新村宗敏§	分林孝夫§
昭和32年卒	高仲　正※	石黒文夫§	鈴木康雄§	高木茂夫§	鶴田　実§
昭和33年卒	中村勝義※	小川昌保§	大庭一郎	高取和郎	毛利　正
昭和34年卒	笹野英雄※	木村　清§	小倉嘉五郎	島峯望彦	角田吉弘
昭和35年卒	君島正彬※	奥窪伸之	黒沢淑郎	斉藤　隆	鈴木重文
昭和36年卒	前田敏晴※	松島章浩§	金西信次	玉田輝巳	藤本康雄
昭和37年卒	藤原充雄※	安藤修一	今井康雄	小山征治	矢崎和則
昭和38年卒	畑中耕一※	石川将一	伊藤　進	河南雅章	小杉好道
昭和39年卒	中野紘一※	勝木康隆	小松康宏	中村有宏	渡辺和子
昭和40年卒	坂田英明※	太田健三	杉谷英雄	滝下満之	横井幹枝
昭和41年卒	鈴木鎮世※	稲垣英雄	加納節夫	柴崎道博	灰原義夫
昭和42年卒	鈴木長生※	荒井正雄	兼子　勇	小清水敏昌	桜井善典
昭和43年卒	高橋繁治※	上野直毅	小林　繁	西尾公一	松田信行
昭和44年卒	岸田邦雄※	牛込陛阜	小川仁志	武田文男	西村友則
昭和45年卒	黒河内雅夫※	平川雅子	藤井裕一	森　孝之	吉川和基
昭和46年卒	藤田正雄※	奥村恭久	鈴木　至	中村勝巳	肥田興造
昭和47年卒	高木健光※	国井敏信	久保秀一	矢野間道明	吉田　守
昭和48年卒	大川成司※	大河内一紀	樺島順一郎	柴崎文雄	三山義博
昭和49年卒	日向一正※	芹沢典裕	布目敏正	松本　徹	山上和夫
昭和50年卒	草間国子※	井出純子	金井　覚	嶋　元	南　武夫
昭和51年卒	豊田　隆※	河村俊一	佐々木みどり	鈴木　孝	古谷幸子
昭和52年卒	苅部博哲※	菅野圭介	木村　修	本馬康弘	山本　晃
昭和53年卒	熊井俊夫※	河相行宏	葛岡康広	西　利和	吉野達規
昭和54年卒	藤田　進※	石塚善久	長瀬克美	松島利恵子	山口　明
昭和55年卒	田中淳一※	飯島尚志	梅沢芳夫	神山準一	小島　進
昭和56年卒	大賀真司※	川上輝明	鈴木克春	瀬戸　悟	玉置邦彦
昭和57年卒	山下義昭※	伊藤　純	久米　実	茂市一平	森口栄孝
昭和58年卒	遠藤正浩※	川上千秋	小棚木荒太	平沢和彦	宮崎　博
昭和59年卒	池田奈津江※	石田正弘	川上良江	川辺良樹	古畑雄司
昭和60年卒	斉藤勝巳※	伊沢克彦	牛込彰彦	鯉沼和広	高橋善一
昭和61年卒	原　英行※	高松　智	平井康正	広川明久	吉野隆章
昭和62年卒	椎名宏吉※	石井武男	香山文明	岸　哲也	鈴木弘孝
学内	岡村　信§	小山　隆§	中村　健§	椛沢洋三§	山内　盛§
	長谷川明§	青木正忠§	内倉和雄§	道祖土勝彦§	北中　進§
	小池勝也§	井口法男§	本橋重康§	三宅宗晴§	石毛久美子§

常任理事　58名　理事　175名

監事

昭和45年卒	本吉義博	昭和46年卒	田口信夫	昭和47年卒	山口元一

監事　3名